

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
108	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Sequelae of systemic hypertension in alcohol abstainers, light drinkers, and heavy drinkers. 高血圧の予後は飲酒状況によって異なるか?	
執筆者	
Klatsky AL, Koplik S, Gunderson E, Kipp H, Friedman GD.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Cardiol. 2006 Oct 15;98(8):1063-8.	
キーワード	
飲酒、高血圧、予後、相互作用	
要旨	
<p>背景：</p> <p>高血圧が飲酒状況と関連していることは、重度飲酒者で高血圧者が多いことで示されている。飲酒の有害な、あるいは有益な作用は飲酒関連の高血圧とその後の予後の関連を修飾している可能性がある。そこで著者らは 127212 名をベースラインの飲酒状況別に追跡し、その後の予後(死亡、入院、高血圧の診断)を調査した。</p> <p>方法：</p> <p>分析は 5 つの飲酒カテゴリー別に実施された。すなわち非飲酒者、過去飲酒者、毎日は飲まない者、毎日 1-2drink (1 合まで)、毎日 3drink (1.5 合)/日以上の群である。コックス比例ハザードモデルを用いて基準群 (収縮期血圧/拡張期血圧 120-129/80-84 mmHg) と比較した 130-139/85-89 mmHg 群、140/90mmHg 以上群の各エンドポイントに対する相対危険度を算出した。調整要因として、年齢、性、人種、body mass index (体重/身長<sup>2</sup>)、教育歴、喫煙を用いた。</p> <p>結果：</p> <p>全てのエンドポイントの相対危険度は血圧レベルの上昇に伴い上昇した。これはどの飲酒グループにおいても共通であり飲酒状況と血圧がエンドポイントに与える相互作用は検出されなかった。以上より高血圧の危険は飲酒状況に関わりなく観察されることが明らかとなった。</p>	